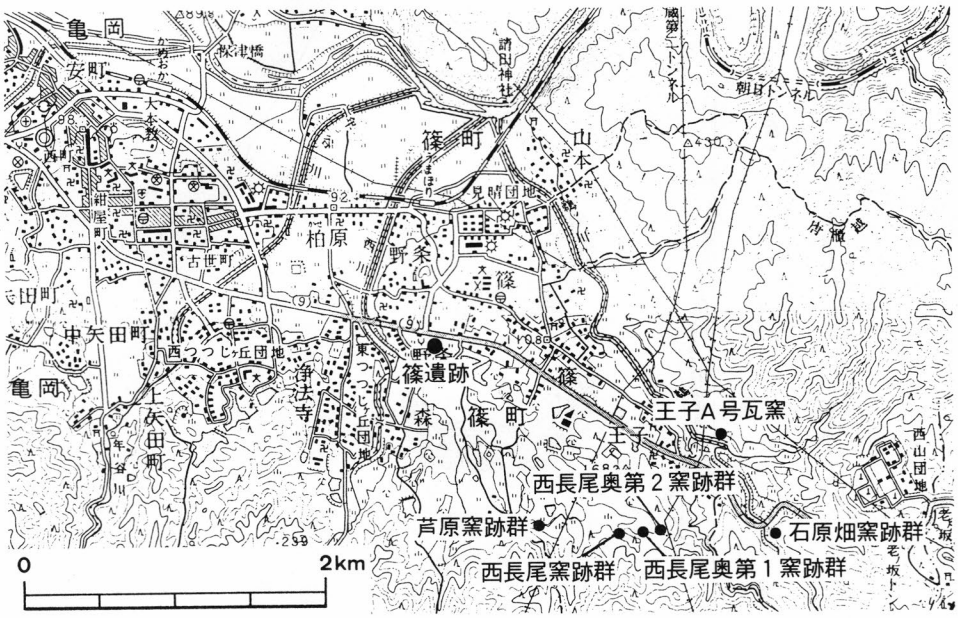
篠・西長尾奥第２窯跡群１号窯覚書

引　原　茂　治

1　はじめに

篠窯跡群は、亀岡市篠町の南側山林一帯に位置する。総数100基以上を数える窯跡が、小支群を形成して分布している。このうち、調査を行ったのは、９支群20窯跡である。内訳は、半地下式窖窯12基・半地下式窖窯とみられるもの２基・特殊窯６基である。特殊窯のうちには、平面がほぼ三角形を呈する半地下式平窯５基・平面砲弾形の半地下式平窯１基がある。平面三角形の窯のうちの１基と砲弾形の窯は、ロストル(火格子)形式の特異な窯体構造をもつ。これらの窯跡の操業時期は、８世紀中頃から11世紀前半頃までとみられ、主に須恵器を焼成する。10世紀には、緑釉陶器も焼成している。

以上の窯跡の調査結果については、『京都府遺跡調査報告書　第２冊　篠窯跡群Ⅰ[1]』・『同　第11冊　篠窯跡群Ⅱ[2]』(以下、『篠窯跡群Ⅱ』と略称)で報告している。この小文は、『篠窯跡群Ⅱ』の記述内容と重複する部分があることを、あらかじめ明記しておく。

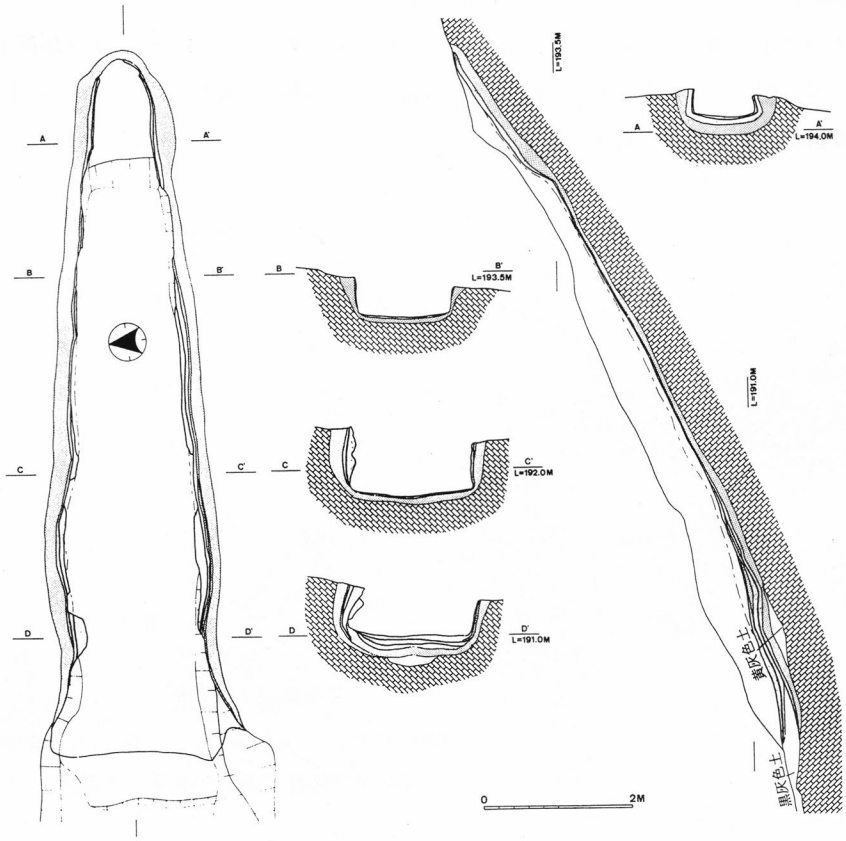


第１図　窯跡位置図(１／50,000)

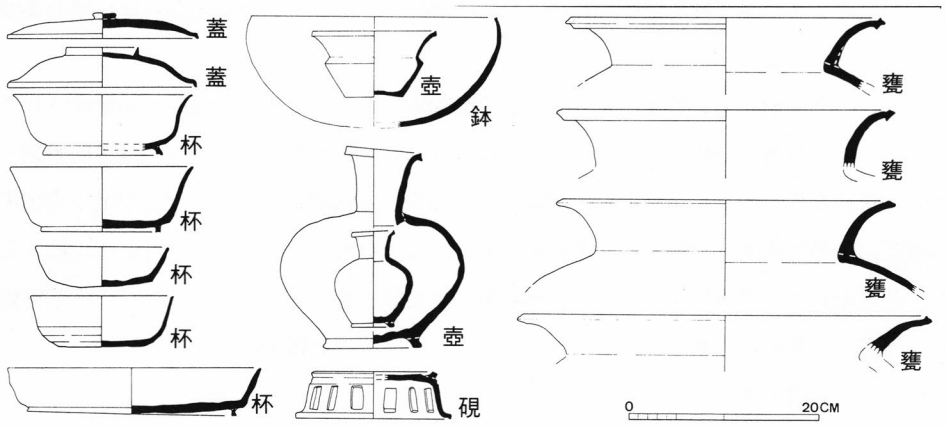
2　窯跡の概要

西長尾奥第２窯跡群は、篠窯跡群のうちでも東側に位置する支群であり、標高190m前後の高所に位置する。２基の窯跡の存在が想定されているが、調査を行ったのは１号窯と名付けた窯跡である。

窯体　この窯跡は、南側の山地から北に向かってのびる丘陵の西側斜面に位置し、窯体の主軸はほぼ東西方向である。丘陵斜面部に焚き口をもち、稜部付近に煙道部がある。この窯体は、地山を「U」字状に掘り込んで構築された半地下式窖窯である。長さ約９m・床面最大幅約1.8mであり、これまで調査を行った窯跡のうちでは最も規模の大きいものである。また、窯体下部に、長さ約5.6m・幅約３mの前庭部が残存している。他の窯跡では残存していない部分である。



第２図　窯体実測図



第３図　出土須恵器実測図

窯壁は、スサ入り粘土を貼り付けており、表面には手の圧痕が残る。天井部は崩落しているが、窯体内に落ち込んだ窯滓からみて、スサ入り粘土で構築されていたものとみられる。床面にも粘土を貼るが、スサは入っていない。

燃焼部では、床が３面みとめられる。暫時補修を行ったものであろう。焼成部でも、窯壁にスサ入り粘土を貼り付けて補修した痕跡がある。焼成部の床面傾斜角度は25度であり、他の窯跡に比べて最も緩い。なお、焼成部下部のほぼ平坦な部分には、その焼成位置を示すかのように、大形の須恵器甕片が散乱している。焼成部と煙道部の境は段になる。煙道部の床面は、少なくとも１回は補修しているものとみられ、粘土を貼り足すとともに、その中に須恵器杯などをタイル状に埋め込んでいる。

灰原　窯体下部に、前庭部を覆いこんで、灰層・焼土層が堆積している。南北約17m・東西約9.5mの広がりをもち、最大層厚は約60cmである。最下層は焼土層で、その上に灰層が数層堆積している。焼土層・灰層ともに、多量の須恵器を含む。これらの須恵器は、２大別でき、『篠窯跡群Ⅱ』では、「上層」・「下層」に分ける。

操業時期　この窯の出土須恵器については、『篠窯跡群Ⅱ』の編年では、「下層」を８世紀第３四半期、「上層」を９世紀第１四半期に位置付けている。最近、伊野近富氏が篠窯跡群出土須恵器を再検討し、編年を行っている[3]。それによると、「下層」を８世紀中葉、「上層」を９世紀前葉に位置付けている。いずれにしても、この窯の操業は、篠窯の操業開始時期である８世紀中葉頃に始まり、９世紀前葉頃まで比較的長期にわたって操業していたものとみられる。このことは、窯体の補修状況からも推定できる。

篠窯跡群のうちで、この時期の操業が確認されている窯は、石原畑窯跡群３号窯、西長尾奥第１窯跡群１号窯、西長尾窯跡群１・４号窯、芦原窯跡群１・３号窯である。これら

のうち、前2者が篠窯操業開始時期の8世紀中葉頃、その他が8世紀末から9世紀前葉頃に比定されている。

篠窯の操業開始から終焉までについて、『篠窯跡群Ⅱ』で「3つの画期」が想定されている。第1の画期は丹波国府の整備・丹波国分寺の創建を契機とした篠窯の操業開始期、第2の画期は長岡京・平安京遷都を契機とした篠窯の隆盛期、第3の画期は半地下式窖窯が消滅し小形特殊窯が出現する篠窯の縮小期である。終焉については、伊野近富氏によると、藤原道長の法成寺造営に伴い、篠窯跡群の北側に位置する王子A号瓦窯へ工人が移動し、篠窯での須恵器生産が終了したとされる[4]。この窯の操業時期は、第1の画期から第2の画期までの間である。

3　窯跡の周辺

この窯跡からの出土須恵器には、大形の甕が多く含まれているのが特徴といえる。全体量からみれば蓋杯が最も多く、これは他の窯跡と同様であるが、甕は、口縁数で67点出土しており、他の窯跡よりもかなり多い。

窯の構造からみれば、上述のとおり、篠窯跡群の半地下式窖窯のうちでは最大規模であり、床面傾斜角度は最も緩い。このような構造は、焼成時の温度がゆっくりと上昇し、大形製品の焼成には最も適していたものとみられる。このようなことから、この窯は、甕などの大形製品を焼成することを主たる目的の一つとしていた窯と考えられる。

このような構造は、これまで確認された篠窯跡群の半地下式窖窯にはみられず[5]、第1の画期から第2の画期の間でも唯一である。以上のような点から、第1の画期から第2の画期までの間には、小・中形製品を焼成する窯と大形製品の焼成も可能な窯の2種が存在していたものとみられる。

この窯跡は、上述のとおり、篠窯跡群のうちでも東側に位置し、しかも丘陵上の高所に立地する。これは、第1の画期の窯跡とされる石原畑窯跡群3号窯や西長尾奥第1窯跡群1号窯にも共通する。第2の画期にあたる西長尾窯跡群1・4号窯や芦原窯跡群1・3号窯はやや西側に位置しており、しかも平地に近い場所に立地する。第2の画期以後、窯の分布はさらに西側に広がり、平地に近い場所に築かれる。

このような窯の立地の変化を考える手掛りの一つとして、近年、亀岡市教育委員会によって調査された篠遺跡がある[6]。篠遺跡は、篠窯跡群の北側の河岸段丘上に位置し、現在の京都府北部の主要幹線である国道9号の南側に接している。この遺跡からは、8世紀後半頃から平安時代中期頃にかけての遺構が多数検出されている。遺構の変遷をみると、8世紀後半頃までは竪穴式住居群であるが、8世紀末ないしは9世紀初頭頃には掘立柱建物群

に変わる。

これらの掘立柱建物群は、柱方向などから数時期に分けられるが、数棟の建物が方向をほぼそろえて配置されており、しかも５間×２間など規模の大きい建物が含まれている。出土遺物には墨書須恵器もある。このようなことから、この建物群は、一般集落とは様相を異にしており、官衙的な性格が考えられる。また、窯疵がある須恵器も出土しており、遺跡の立地からみても、篠窯跡群との関連が想定される。

掘立柱建物が出現する８世紀末ないしは９世紀初頭頃は、第２の画期の時期であり、この頃に、おそらく丹波国が、本格的に篠窯の掌握に乗り出し、長岡京・平安京での大量消費に応じる体制を整えていったものと考えられる[7]。また、この遺跡からは、陶土つくりに関わるものとみられる溝なども検出されており、あるいは、官営工房的性格も持つものであったかもしれない。このような状況を反映して、この建物群との交通に便利な場所に築窯されるようになったものとみられる。

石井清司氏は、第１の画期に比定される石原畑窯跡群３号窯の製品である口縁端内面部に沈線をもつ高台付皿が丹波国分寺跡から出土することから、篠窯の操業開始が、丹波国府整備・丹波国分寺創建を契機とするものと考察している[8]。西長尾奥第２窯跡群２号窯からも、鉄鉢形の鉢が出土しており、国分寺との関連が推定される。また、伊野近富氏は、小形の壷の篠窯独特の口縁形態に注目し、その平城京・長岡京・平安京からの出土状況により、「長岡京造営時に都市への供給窯としての足がかりをつかみ、平安京造営以後は、その主力窯として稼働した」とする[9]。国府・国分寺を主な供給先とすると、篠窯の操業には丹波国が関与していたものと考えられるが、それは、国内で消費する容器の生産を主眼としたものであろう。その意味では、第２の画期までの篠窯は、丹波国内の需要を主としてまかなっていた在地的な窯と考えられる。

上述のとおり、第２の画期までは小・中形の供膳・貯蔵容器を主に焼成する窯と大形貯蔵容器をも焼成する窯の２種がみとめられるが、それ以後は前者のみになる。これは、第２の画期までは在地の消費に応じて全ての器種を焼成していたものが、それ以後は都で大量消費され、しかも焼成効率の良い小・中形の器種の焼成へと、生産方針を変更していったものではないか。篠窯は、長岡京・平安京の近くに位置するため、そこで最も多く消費される器種に生産の主力を転じていったものではないか。また、この変更の背後には、都を媒介とした全国的な流通ルートに組込まれていったことを想定すべきかもしれない。

４　ま　と　め

以上述べてきたことを整理して、まとめとしたい。篠窯は、当初は、主として丹波国府

・丹波国分寺などの在地の需要に応じていた窯であった。その後、長岡京・平安京遷都を契機として、都での大量消費に応じるため、おそらく丹波国が本格的に掌握し、篠窯は隆盛する。また、その過程で、消費される全ての器種の生産からある程度限られた器種の生産へと、生産方針が変更される。

このような、篠窯の推移のなかで、西長尾奥第2窯跡群1号窯は、上述の第2の画期以前の篠窯の性格を端的に物語る窯跡といえよう。第2の画期以後は、必要とされなくなった窯であり、その時期に生産機能を停止する。

現在、篠窯については、主に平安京以後について注目されている。篠窯製品の他地域からの出土についても、独特の口縁形態をもつ鉢などについて知られているばかりである。特に、平安京以前の篠窯製品については、丹波地域でも同定は困難である。今後これらのことが明確になれば、平安京以前の篠窯の様相は、さらに明確になるものと考えられる。

この小文の執筆にあたり、亀岡市教育委員会樋口隆久氏・亀岡市文化資料館中澤勝氏からは、篠遺跡についてご教示いただいた。また、当調査研究センター伊野近富氏から、多くのご教示をいただいた。末筆ながら、記して感謝いたします。

（ひきはら・しげはる＝当センター）

1　水谷寿克・石井清司・久保田健士・立花正寛・波多野徹・小島敏明・松元達也「篠窯跡群Ⅰ」（『京都府遺跡調査報告書』第2冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1984年
2　水谷寿克・石井清司・引原茂治・岡崎研一・立花正寛ほか「篠窯跡群Ⅱ」（『京都府遺跡調査報告書』第11冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989年
3　伊野近富「篠窯原型と陶邑原型の須恵器について」（『京都府埋蔵文化財情報』第37号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1990年
4　伊野近富「丹波・篠窯の終焉」（『中近世土器の基礎研究Ⅲ』　日本中世土器研究会）　1987年
5　注2に同じ
6　亀岡市教育委員会「篠遺跡第2次発掘調査　現地説明会資料」　1990年
7　時期が下る史料ではあるが、『西宮記』に、寛仁2(1018)年の敦良親王の元服にあたり官が丹波国に須恵器の貢納を命じた記事があり、篠窯が丹波国に掌握されていたものとみられる。
8　石井清司「石原畑窯跡出土のヘラ描き文字・文様の須恵器について」（『京都府埋蔵文化財情報』第21号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1986年
9　注3に同じ